

## 難波西鶴と

## 海の道

【31】

森田 雅也

引き続き、西鶴の『日本永代蔵』(元禄元(1688)年刊)巻四の「茶の十徳も一度に」に描かれる敦賀の商人は、生活に困ることがない。

敦賀の人々の用心深さ、賢さをたたえられた後、以下のように続けま

「兎角正直の頭をきけて、当座の巨那あひしらひに物買ひをまねき、商上手の者は世をわたりかねず」

―何につけても、と敦賀人の特殊例として

もかく正直に頭を下げて、その場限りの客にでも、お得意の旦那客のような扱いをして

諸国の商売人たちを招く。そんな商売上手の商人は、生活に困ることがない。

## 創意工夫だけで大もうけ

の利助という意味だったの

我が身一つで、その日暮らしをしている利口

です。

「荷い茶屋」とは、

あえて訳せば移動喫茶

店となるでしょう。1

杯いくらのお茶売りか

ら、それを「えびす茶」

として売るといふ創意

工夫だけで大もうけし

た「小橋の利助」は、

茶葉を売る店舗を持

ち、ついには、大きな

茶問屋になったとい

うのです。

西鶴の『日本永代蔵』

では、親譲りではなく、

知恵才覚だけで、一代

で金持ちになるのを商

人の理想としますが、

「小橋の利助」は、ま

さにその典型です。と

ころが一転、商人道を

外れる利助。次回に続

きます。

(関西学院大学文学

部文学言語学科教授)

「町はづれに、小橋の利助とて、妻子も持たず、口ひとつをその日過ぎにして才覚男、荷い茶屋しをらしく拵へ、その身は玉だすきをあげて、くくり

ある日から思いつき、しゃれた荷い茶屋をしらえて、自分の衣装はたすき掛けに、くくり拵姿もさわやかに、烏帽子を面白くかぶり、他の人より早く朝市に出て、「えびす様の朝茶だよ」と呼び込むと、縁起をかつく商人たちは、喉が渇いてない者たちもこのお茶を飲んで、相場より高い2文づつなげ入れられ、日毎の仕合せ、程なく元手出来して、葉茶見世を手広く、その後はおまたの手代をかかへ、大問屋となれり」

「小橋の利助」と呼ばれる、妻子を持たず、

## 敦賀の悪徳商人利助